

アスリートのキャリア形成支援推進のための課題

田中ウルヴェ京*

生涯スポーツプロモーションという立ち位置で、今日はアスリートのキャリア形成支援推進のための課題ということでお話をします。まず、アスリートのキャリアという言葉、日本では大体2000年ぐらいからそういう言葉が使われるようになってきました。例えば、セカンドキャリアという言葉があったり、キャリアトランジションというような言葉があったりします。選手にとって、引退後のキャリアということも、現役中に考えることは大事なことでよってというようなことも、少しずつ囁き始められたのが2000年以降です。少し振り返ってみると、例えば海外は1980年代からそんなことが重要だと、競技引退後のキャリアというものをもっと考えていかなければいけないというようなことを言われてきたのが、80年代以降です。海外での分かりやすい例とすれば、オーストラリア、イギリス、アメリカ、この3カ国が一番最初のメインとなって、オリンピック選手が引退した後も、色々な他のキャリアで活躍できるような、キャリアプログラムというものを、オリンピック委員会の中で作っていかねばいけないなんていうことを話して、90年以降、この3カ国がメインとなってキャリアプログラムが海外では始まりました。それを基に2002年に、日本ではJリーグが一番最初にキャリアと名のつくプログラムを始めました。Jリーグはキャリア支援というような立場で、セカンドキャリアプログラムを2002年に立ち上げ、その立ち上がったJリーグのシステムを基に2004年に、日本オリンピック委員会(JOC)が競技引退後のセカンドキャリア支援プログラムというものを作りました。こういうことをシステムとしての概観として覚えておいていただければと思います。

でも、皆さんはせっかく学生でもいらっしゃいますし、自分を元として取り上げていただきたいので、このことについてもう少し具体的にお話をさせていただくと、そもそも何故アスリートのキャリア教育が必要なんだろうということ、今一度、皆さんと考えてみたいと思います。何故なのか、とても簡単にシン

ブルに一言、言うとするれば、競技人生はいつか必ず終わるし、その終わり方が人それぞれだからということに凝縮されます。どういう意味か。どの選手にも決まっていることが、いつか必ず競技選手という役割は終わるとするのがまず1つです。でも、もう1つは、その人によってそれぞれ違うことが、終わり方です。終わり方。どういう意味でしょうか。終わり方とは、自分の夢を叶えて、その夢というのが日本の1位であろうと、世界一であろうと、代表チームに入ることであろうと、自分の夢を叶えて終わる選手もいれば、戦力外通告で終わったり、夢叶わずに選考会漏れして終わったり、結局叶えたのか叶えないのか分かんないけど、大学4年になったから辞めようだったり。終わり方というものは人それぞれです。では選手を終わった後に何があるかと言うと、当然まだ人生は続くわけで、自分自身の人生は続くわけで、その中でキャリア教育が必要という意味は、自分のため、自分のやってきたスポーツのため、そして社会のためということが出来ます。これはどういうことかと言うと、自分のためというのは、もちろん競技だけやってきたし、その競技だけやってきたということの良し悪しがあります。良いこととしては、何かを極めるというような心のメンタルスキルがとても培われてきたというようなこともあります。同時に何かを極めてきた、一所懸命1つのことを頑張ってきたということは、裏を返せば色々な社会常識をもしかしたら培う時間が少なかったかもしれない。人よりも社会経験が、もしかすると、色々な価値観を持っている人間との接触が少なかったかもしれない。そんな意味では競技を終わった後にも、次の仕事をする時に、生計を立てる何か大事な専門分野を培っていく時に、必要なものが足りないのかもしれない。自分のために競技引退後の自分を作っていくために学んでいこう、選手以外の自分を作っていこうということも1つとしてはそれは大事です。

2つ目は、自分のやってきたスポーツのため、どういうことかと言うと、競技引退後、指導者になるにし

*鹿屋体育大学客員教授(株式会社ポリゴン)

でも、選手としてのマインドからチェンジをしなければいけません。選手としてのマインドだけでは指導者としてやっていけないので、指導者としての知識を学ぶためのキャリア教育は必要ですし、あるいは引退後には指導以外ももちろんどんな仕事にも就くことができるので、どんな仕事に就くにしても、その仕事の中で自分自身が何か専門分野としてやるためのキャリア教育が必要です。大事なことはもう1つあって、例えば他の職種にいく時に、そのスポーツの指導者ではなく、どこか全く違う仕事を始める時に、自分自身の経験もあります。元シンクロ選手だねとか、元野球選手だねというように、元どここの競技出身と言われる場合も大変多いです。その選手の時の競技生活が長ければ長いほど、あるいはその成績がすごく良かった選手であればあるほど、元何々選手の何々君が、というように言われたりする。これはどういうことかという、自分のやってきたスポーツのためと書いてある通りで、自分の出身のスポーツ、競技、スポーツ団体に、私という人間が引退後にどう活躍するか、どう社会貢献するかによって、そのスポーツの団体にも影響があるというようなことも、特にオリンピック選手にはお話をしています。

3番目に社会のため。これは別にスポーツ選手だろうと、選手じゃなかろうと、我々は学校で勉強してきたことを社会に役立たせる為に仕事をするわけですが、そんな社会のためにもアスリートが引退した後にキャリア教育が必要だというようなことが理由です。選手自身にはもちろん元気付けたい時に必ず言っていることが、スポーツで培った様々な手腕、Trans probable skill, 移行可能スキルと直訳できます。移すことが可能。移行可能スキルは、競技を終えた後も使えるものですがこれは何かというと、例えばサッカーで培った脚力とか、水泳で培った肩幅の広さとか、大胸筋とか、そんな筋肉とか、スポーツの技術は、もしかしたらビジネスパーソンになった時には使えないかもしれませんが、そのキック力を養うまでに頑張った辛抱強さとか、大胸筋を鍛えるために頑張った集中力とか、そんなようなたくさんのTrans probable skillがあるんですよというように、現役を終わろうとしている人達にお話をしたりもします。これは、メンタルなスキルだけではありません。指導者の言うことをまずはしっかり聞いて実行してみるというように、選手特有のスキルとも言われています。これどういうことか

と言うと、白と黒だったら黒だと自分は思うことでも、先生が白といたら、まずやってみよう。僕は黒だと思ふけど、白だと言うんだったらやってみようというふうに、自分が信じてることと違うことも実践してみる。この力は、実はスポーツ選手には大変あるというふうに言われています。このようなことも、素直に頑張ってみるといような仕事のスキルの1つでもあるので、是非学生の皆さんは、自分もこれに置き換えていただくなれば、自分が選手をやっていた時に、どんなスポーツでもいいです。あるいはいろんなスポーツをやってらした学生さんもおられるかと思いますが、スポーツをやっている最中に、私という僕という人間が培ったTrans probable skillはどんなものなのかなということを考えてください。

さて、そうは言っても、例えばオリンピック選手、トップアスリート、プロアスリート、つまり自分という人間はこの競技を極めたというふうな自信を持って引退した選手に、特有の悩みというものが5つあるとアメリカの心理学者の研究で言われています。まず自分という人間は誰なのかというアイデンティティー喪失感。これはどういうことかと言うと、自分という人間が選手という役割以外で存在する感覚が無いということです。ずっと水泳選手の田中ですというふうに生きてきたのに、競技引退後に突然水泳選手というアイデンティティーが無くなっちゃうと、まるで自分という人間が消え去ったかのように感じるというのが、この悩みです。次に将来への不安。明確な目標が無いことの焦燥感ですが、これは、選手でずっと頑張ってきた人だと、朝起きてからの予定が決まっているのが当たり前だという人生を過ごしていることが多い。1年のスケジュールも決まっていることが多い。いつも大会にどうなっているかというスケジュールリングをするのが当たり前的人生を送っていると、引退した後にスケジュールが無いということ自体に不安を覚えるというような悩みです。3番目は、選手という特別な社会的ステータス消失による失望感。これは、例えば甲子園というような高校生の時ですら、少し地域で有名になったり、少し色々なテレビで自分が出るようになったりすると、引退後にその機会が無くなるので、そのことで自分が不安になるという人ももちろんいます。それから、引退せざるを得なくなった場合の怒り。これは戦力外通告の人のことなのですが、戦力外通告が自分の能力のなさで干されたということなら、まだ

受容ができて、スポーツの中ではどう考えてもこれは審判のせいだろうとか、これは派閥のせいだろうとか、色々な不公平感を感じて引退せざるを得なくなるケース等もあつたりします。よくあるケースとしては、全くの事故で大怪我をして結果的に自分の大事な足をぼろぼろにってしまったとか、誰かのせいだ怪我をしてしまったという時に、その怪我は俺のせいじゃなかったのに、というような怒りがあると、それを引きずってしまうというものです。そして最後は、競技そのものから得られた様々な価値の消失に対する失望感。例えばスポーツ界、自分のいたスポーツでの親しい人間関係から離れたくないとか、そんなようなものもここに入っています。もちろん悩みというものは、一般化できるものではありません。人それぞれ様々な悩みをかかえて、競技引退をする訳ですが、その後にこの生涯スポーツプロモーションという立ち位置からの提言とすれば、何でそんな選手達がキャリア教育を受けて、次の生活を頑張っていくのかという理由付けとしては、スポーツ界の好循環創出のためということが当然挙げられます。つまり競技引退後に元アスリートが様々な分野で活躍することによって、色々な親御さんが、今すでに少子化問題が非常に深刻な日本です。子供にスポーツをさせるかどうかということの選択の時に、スポーツをさせるとスポーツ馬鹿になるのではないかというふうに考える親御さんも多くなっています。そんな時に、いや、スポーツをやらせると勝った負けた以上に、こんなふうな Trans probable skill が培われるんだとか、例え負けて引退をしたとしても、例え夢叶わず引退をしたとしても、その後にこんなふうな違うキャリアで活躍をできるのがスポーツ選手なんだというような見られ方ができると、スポーツそのものが文化になりえるというような見方ができます。こんなふうな見方の一因として、選手が自分のため、そして自分のスポーツのため、社会のために色々な分野で活躍をし、社会貢献をするということが大事です。国としてセルフモチベーターの発展は重要と書いてあります。これは海外の研究で出ている言葉なのですが、スポーツ選手というものは、良くも悪くも馬鹿みたいに頑張る奴らですというような表現を研究者がしています。どうということかという、一旦目標を見つければ突進するぐらい集中力がある人間、それが選手だと。つまり、頑張れるような人材は、引退した後にも是非競技以外でも活躍していただきたい。それが国力になります

というような見解で発表している研究者も海外にはいます。

今後の課題としては、今日ご紹介したことはほんの一部にはなりますが、このようなことを現役中からの選手への教育として、あるいは指導者への教育として様々な機会を設けて、引退後のキャリアって実は重要です。何で重要かという、こんな視点から重要なんですという教育は当然今後にも必要になると思います。教育だけでなく、セカンドキャリア支援というスタンスも当然大事です。これは引退をした後に特にプロの選手だったら、その出ていたお給料、それと見合うぐらいのお給料を何かの仕事で稼がなければいけません。そんな時の起業支援だったり、就職支援だったりというのも大事ですし、若い人ならば、またもう一度勉強し直すための、復学支援、留学支援といった、ハード面でのセカンドキャリア支援ということも当然大事になります。

もし学生の皆さんで、まだ競技を頑張っておられる方がいらっしゃれば、競技をしている理由は競技選手として勝つためもとても大事ですし、そして引退後の人生でこんなふうな人間になるための1ステップにすぎないというような考え方も是非していただくと、選手として必要な集中力というようなことにももっと気合を入れて、力を注げるようになるかと思います。学生の皆さんにはキャリア教育の重要性とか、どんなことが今の課題かということも聞いていただいて、これから皆さんが卒業した後も、こんなことを始点として色々なところで活躍をしていただきたいのですが、ただ自分は元選手ですから、キャリアトランジションプログラムのことを、選手や指導者に申し上げる時も、ただ最後にどうしてもお忘れいただきたいことは1つです。選手たるもの人間力を培うことが選手生活での目標ではありませんということは、必ず申し上げます。語弊があるかもしれませんが、一番の軸として競技選手が大事なのは当たり前のことです。勝つことです。まず勝つことというものを目標にして、初めてどう勝つか、どんなふうなプロセスを通過して勝つかという、勝ち方。このことがキャリア教育の部分とインテラクトするものです。よくキャリアトランジション教育をする研究者とどうしても私がおつかってしまふことで、勝つ負けるではなく人間力を培うことが競技選手には大事だというような表現は、時として負けても良いというような思考を作る可能性も大変多くあ

ります。勝つための、勝ち方。この勝ち方の中に当然、人間力が含まれるということですから、どうぞ学生の皆さんは勝つためにどのようなことをするかの中に、キャリア教育のことを入れていただければと思います。

鹿屋体育大学
生涯スポーツプロモーションの現状と課題

「アスリートのキャリア形成支援
推進のための課題」

田中ウルヴェ京

Copyright © 2013 Miyako Tanaka-Oulevey All Rights Reserved

なぜアスリートのキャリア教育が
必要なのか

- ◆ 競技人生は、いつか必ず終わる、終わり方は人それぞれ
- + 自分のため
- + 自分のやってきたスポーツのため
- + 社会のため
- ◆ スポーツで培った様々なtransferable skillは、競技を終えた後も使える

Copyright © 2013 Miyako Tanaka-Oulevey All Rights Reserved

引退時にアスリートが抱える悩み

- + 自分という人間は誰なのか、というアイデンティティ喪失感
- + 将来への不安（明確な目標がないことの焦燥感、一から何かを始めなければいけないと感じるストレス）
- + 選手という特別な社会的ステータス消失による失望感
- + 引退せざるを得なくなった場合の怒り
- + 競技そのものから得られた様々な価値の消失に対する失望感

引用「ライフトランジション」しろういん刊 田中ウルヴェ京著
Copyright © 2013 Miyako Tanaka-Oulevey All Rights Reserved

スポーツ界の好循環創出のために

- ◆ 競技引退後に元アスリートが様々な分野で活躍すること
- + 指導者、NF、NOC、IF
- + 大学、民間クラブ
- + スポーツ関連企業
- + 一般企業
- + 専門家
- ◆ 国として、セルフモチベーターの発展は重要
- ◆ 子供を持つ親へのプロモーション

Copyright © 2013 Miyako Tanaka-Oulevey All Rights Reserved

アスリートのキャリア教育の課題

- ◆ キャリアトランジション教育
- + 現役中からの教育
- + 指導者への教育
- ◆ セカンドキャリア支援
- + 各種支援（就職、復学、留学、起業、ネットワーキング、ビジネススキル）

Copyright © 2013 Miyako Tanaka-Oulevey All Rights Reserved

人生の目的と競技目標

Copyright © 2013 Miyako Tanaka-Oulevey All Rights Reserved

ありがとうございました

"The Challenge is not only to pursue excellence but to do so without destroying the rest of your life"
Terry Orlick



田中ウルヴェ京
Miyako Tanaka-Oulevey
miyakoconsul@coping.jp
<http://www.coping.jp>